

アラル海鳥瞰図

時 2009年ごろ

所 カラカルパクスタン共和国、首都ヌクス市

人 いしほし  
 缸麻子

馬倒了  
マータオラ

酒井春夏  
はるか

木下日向子  
ひなこ

竹下洸

高良愛  
たから

加藤友香  
ゆか



## オード 夢の鞍

ただ一枚の布せなかに 兄はアジアの砂こえて  
アムダリヤ涸れ日に灼かれた 塩の湖に着いたの

そこはかつて千鳥やしぎたち羽根休め  
クレーンくる太腕 日に照り映えた土地  
古いカザフのことばによるとここは  
灌木の茂る土地という意味だったそうだ

あぶみもなくて轡は革 裸馬だったのね兄さん  
蒙古も月氏も北極星のまぼろしよと嘯ぶっていた

アラル海よ歴史のペイジは風に飛ぶ  
そら射る旅なら三千年超えたよ  
イルカ沙漠に骨のこすこともある  
いつまたオアシスはよみがえるのだろう

## 第一場 天窓の麻

麻子

こんにちは。だいぶ前から私には時間の感覚がないんです。この屋根裏部屋にひとりで座っていると、天窓から差しこむ淡い光のうつろいがほとんど私にとつての「時間」のすべてです。窓ガラスは古くてくすんでいます。空の様子はもうひとつはつきりしない。窓に手は届かないのでこうやって、長い棒で晴れた日には窓枠を押しあげて、風と、外の音とを感じます。下界はもちろんな町です。小さな町ですが、窓を開くといがいとトラックの通る音や、子どもたちの走りまわる声などでにぎやかなものです。今日は暖かいかな、涼しいかな、と思いつつと押しあげる瞬間が好きですねえ。動かない雲が垂れこめる冬の空も好き。私は、とくに気がふさぐということがなくて、窓の向こうの景色ならばどんなのでも好きなんです。景色、といったって、時おり屋根のどこかに住んでいる大きなコウノトリが視界を通りすぎてぎよつとするくらいで、ほとんど空ばかり見てるんですけどね。雪が積もると、屋根裏部屋はかなりうす昏くなるのでロウソクをともします。ロウソクのやわらかな光は、私の心にもうひとつの、空想の窓を開きます。そんなとき思ふの。私はどうして、この部屋から出ていけないんだろう…？ 秋の終わりがごろになると毎年決まって、煙突掃除の職人さんたちが屋根の上を渡って仕事をします。何か月前、すずで真っ黒の顔をした若いお兄さんがひよいと天窓から覗きこんで、「あ、これは失敬。ごきげんよう、お嬢さん」といって、行ってしまいました。何日か経ったあと、静かな午後でしたが、誰かがドア

をたたくんです。牛乳屋のお婆さん？——違いました。知らない若い男の人です。あの、どちらのかたですか？ かれは、小さな鉢植えを両手で差して、「はい、これ。ひとりのあなたにプレゼント。麻の苗。大きく育ったころに、また来るから」。え？ あなたは誰？「不良ですよ、ただの不良。ハハ」。そう笑って、煙突掃除の人は帰っていききました。人差し指のくらいだった麻の苗は、なかなか伸びませんでした。この北の町は、十月もなかばになるとひどく冷えこみます。麻は伸びるのが早くて忍術の修行で跳びこえるなんて話がありますけど、それは夏の話。いまは枯れこそしいけれど、鬱々ひっそりと冬ごもりをしてるようなのでした。

私の家、どうやら、東北切支丹の宗家だったらしいんです。子どもころ古い大きな家の中をひとりで探検していたら不思議なものを見つけました。床の間の大黒柱に仕掛けがあつて、裏の方に縦長の穴が開くようになっていて、その中に五寸くらいの観音様が安置されていました。晩餉のときに父に、あれなあに？と訊くと、いきなり大きなてのひらが飛んできました。ご飯もなにもひっくり返って私もひっくり返って、うなあ見たんかつ、と叫んだ父の声がひどく遠いところから聞こえてくるようでした。びっくりしちやつて痛くもなかったな。嫂あによめがとりなして私を寢床に連れていき、気にせんで今夜はもうお寝みと世話を焼いてくれました。私、最後まで泣かなかつた。ただ目が冴えちやつて天井の木目がお化けみたいにみえて眠れなかつた。やがてうとうとしたころ気がつくとも母が添い寝してくれていて、なああさちゃん、クロポトゲさんのことはだれにもいっちゃいかんよ、柱の裏にひっそりと隠れてなさるんだから、しずかに置いてあげなあわがねよ、と肩を抱きながら論してくれました。そのときから、私、なんていうか、ひとりになったの。父も母もすーっと遠のいて、ひとりなんだなあって思ったかわりに、あのクロポトゲ様の少し笑ったような小さな顔がしつとり心に沁みこんで——それからどれだけ経つたのかな、今も天窓の薄明かりがたよりの毎日です。「隠し念仏」という禁じられた宗派があることは、大きくなってから知りました。親戚のだれにもいっただけはありますが、私、思うんです。あれは、あの観音様は、マリア様だったんじゃないかって。観音様は仮面なんじゃないかって。私がどういう経緯で日本を離れて、この町に来たのかは省きます。でもたぶん、たしかに、あの仮面の下にかくされたマリアの心持ちを、なぞって見たかつたんじゃないか。そんな気がしてるんです。

ある午后、またドアが、今度はなにか事務的に冷たい感じでした。つかつか入ってきたのはふたりの公安警察でした。たぶんでつきり留学ビザの不備のことだろうと観念しましたが、意外にもぜんぜん違うことを警官は話しました。 「マフムード・パールシーを知ってるかね？」え？「イラン人労働者だ、煙突掃除をやっとる」。かれは鉢植えを置いて以来、まだ一度

も来てはくれなかったのですが…。「捕まったよ」。…え、なぜです? 「これだ。わからんかね、大麻さ。最近、やつらの組織も手管を遣うようになってね。我々の取り締まりがきついもんだからこうやって市井の人に――」。

今日は窓の外はあかるいです。南の南のずっと遠くには、麻でも棕櫚でもぐんぐん伸びる爛れたような熱い空と地面があるんでしょうね。もし一羽のアジサシになってあの天窓を飛びだせたら、私は沙漠を越えて、ときおり大きなオアシスで休んだりしながら、一路アラビアの森をめざしたい。マフムード・パールシーかあ、そんな名前だったんだ。かれも、心は南の故郷の方を向いていたのかな。飛びたつかどうか、迷っていたのかなあ? ?

## 第二場 旅する羊

倒了

どーもーみなさん、1か月のごぶさたでしたー。毎月最終日曜の夕方お贈りしているFM吉井・ブルームーン・ギャロップ。ナビゲーターの馬倒了マドクオラですー。今日も2時間どうぞおつきあいくださいー。さてさっそくですがリスナーの方からメールが来ております。児玉町在住のはるかさん。「ブルームーンって、満月がひと月に2回あるときの2回目の名前だって聞きましたけど本当ですか?」——えーっと、そうなんですか? そんな科学的な意味合いがあったんでしょうか。ちよっとかつこいいですよねー、ハットトリックとかみたい。真相は調べときますねー。ゆうべは満月でしたね。あつたかくなってきたからでしょうか、ちよっともやっておぼろでよかったですねー。僕の故郷の吉林省長春はよく黄砂が降って空がもやるんですねー。懐かしい気がしましたよー。

さてえーっとでは、先月のおさらいから行きましようかねー。8世紀の三国内戦ではやばやと敗れた高句麗からは、ぞくぞくとボート難民が日本に流れつきました。もともと三国の中でもいちばん早くから国家の体をなしていた文化国ですから、同盟関係はなかったんですけど京都政府はかれらをわりかし優遇して、おもに東方開発、関東東北地方への開墾入植者として位置づけます。小規模にやってるのかと思ったら意外とすげくて、西暦716年、これは高句麗滅亡の18年後ですけど、高麗コリヤの豪族の王子若光ジャウクワウ以下1799人が神奈川の大磯に上陸し、ついで埼玉の飯能に移住して村をつくったと。1799人って、ねえ! まあそれもすごいんですが、そこからさらに北に20キロほど行ったここ吉井町にも開墾の碑が建てられていて、どうやら

高麗郷こまじょうと関係があるんじゃないか。前回のテーマはそういうことでしたね、覚えておいででしょうか。いちおうその碑、あ、多胡碑たごひっていつてじつは日本3大古碑なんだそうです、吉井のみなさん知ってましたかー、私は知りませんでしたーごめんない。えーとそれ、碑文ですね、いちおう読んどきますね。

「弁官符す。上野かみづけの国、片岡かたがわの郡、緑野みどりの郡、甘良かみらの郡あわせて三郡さんぐんのうち、三百戸を郡こおりとなし、羊に給いて多胡の郡となせ」。

このですね、「羊に給いて」というのが問題なんだ、これって日本人で羊っていう名前つてあまりにも考えにくいから渡来者じゃないか、っていうところで先月は終わりましたよね。さて今日はその続きですよ。え？ むつかしい？ いやーむつかしくていいんです。人間はむつかしいことをやってきたんです。

さて今日ですね、私の故郷のことを申します。じつはうちの両親、ナホトカの人なんですよ。えーっ？ ナホトカってどこ？ やっぱそういう反応です？ ナホトカっていうのは、えっと朝鮮とロシアの国境くらいにある港です。第二次大戦くらいまでは国境が不確定で、お互いにはみだしあつて住んでたんです。それがね、日本が負けて、中共ができる、ソビエトが強くなる、朝鮮がズバツと国境引いてのける。そういう二〇世紀なかばでした。

そうやって国境がはっきりしてきても、まあ、もともと住んでた所だし基本的に生活に支障はなかったんですが、あるときね、ソ連のなかで移住政策っていうのが起きてきて、集団で地方に行つて原野を開拓しよう。暮らしやすいように民族ごと動いてコミュニティを作ろう、という、それこそ高麗郷さながらの事業がね、あつたんですよー知らなかったでしょ。線路際で見ると朝鮮人を満載にした長い長い列車が何日も何日も、シベリアの彼方に消えていったつて、これは親父の思い出ですが。ところがね、色んな民族が数万という規模で土地を去っていくなかで、僕の祖父母は考えた。俺たちは移住しても仕方ないよなあ、つて考えたんです。なぜか？

なぜかっていうとねー、僕は回族です。中国風にいうとホイチョウ、もしくは回々かいわいです。馬ばつていうのは回族のすげーえらい家系なんですよ？ で回族つていうのはふつうにいう民族とはちよつと違ってですねー、つまり、イス

ラム教徒のことなんです。もとは民族じゃないんです。僕らには言葉もないし、故郷もない。ただアイデンティティだけあるんですねー。え？ 生活習慣はありますよそりゃ。よく誤解されてますけど、回鍋肉ホイコーロね、あれは別に、おいしいですけど、回族の食べものじゃないんだぜ。あの場合のホイ、回転の回ですね、あの字は、ゆでた肉をもつぺん炒めなおすっていう意味で、べつに僕らとは関係ないの。何でしたっけ、ああそうだ、すんませんてきとうで。でね、まとまって暮らしてすらいないわけですよ回族は。ていうのは、うーんなんていうか、日本だったらお寺に檀家っていうのがあって、地元根づいてるんでしょう？ そうですよね？ でも回族の祖先っていうのはムスリムのなかでも座禅みたいな、個人で瞑想するみたいな系統なんです。だから移住ってことになる、僕んちだけ移住することになる。そんなん意味ないじゃないですか。いや、今だったら違いますよ、旅行でも海外移住でも、現に僕いま交換留学で中国から来てますが、そうしてこうやってけっこうリベラルなこと、公共の電波にのせたってわりに平気な時代ですけど、親の頃は違いますよ。中国に逃れてからも文革とかあって、よくまあこんな時代を迎えられたものだって母なんかいいいます。父は肅正されちゃったんですけどね。

なんかねー。留学でも移住でもいいんですけど、僕なんかねー、どんどん人は動いた方がいいって思うんですよ。行って・見て・帰ってくる。あるいは帰ってこない。動いたことが悲劇だと思ってる、ずっとなんていうか恨みを晴らすために生きてるみたいな感じになるじゃないですかー。でも、日本語でいうと、ええと、「愛憎」？ 好きだけど嫌い、嫌いだけどでも好き：ツンデレ？：ツンデレとは違うか。あーすみません関係なかったです。そのね、故郷って、必ずしも好きじゃないですよ。でも、濃いやじゃないですか。良くも悪くも、そこで育っちゃったんですよ、そういう…。あ、いま差し紙が来ました。えー、ああ、「恩讐」だそうです。おおー、この字面、迫力あるなあ！ うん、そう、そういう故郷への濃ーい思いっていうのを身のうちにくずとためたまま生きていくのって、なんかいいなあって思います。

でね、僕、この群馬の辺鄙なところに来て、すんません辺鄙なんていって、でも辺鄙ですよ。思ったのは、これ、意外と、沿海州の気候と近いなあって。いやー、ぜんぜん違うんですよ？ 違うんですけど、浅間山のスロープがなめらかに見えるのとか、岡がうねうねとずっと続いているのとか、それになにより、冬のこの風ですねー。高句麗の人たちがここへ来て住んでも、そんなに違和感ないっていうか。

あ、メールをいただきました。先月の話題についてですねー。えー、伊勢崎市太田町にお住まいの内山さん。詩人だそうです。へえー！

「高麗郷の近くに吉井の多胡碑があることについてですが、私はこれは高麗郷が分裂してさらに小さな村ができた、ということだと考えています」——  
そうですか：——「高麗郷で奨励されたのはおもに陶磁器の製造でした。牛伏山という良質の土の出る土地があつて、京都の中央政府は特産品として渡来者に作らせようとしたんです。韓国南部が陶磁器に関して日本をはるかに凌駕していることは歴史的に有名です。しかし、高麗郷に住んだのは百済の人ではなくて、北の荒くれた騎馬民族だったわけです」——なるほど——  
「かれらは難民ですから初めはおとなく与えられた仕事をしましたでしょう。しかし、言葉も習慣もほとんど失われていくなかで移住者たちは焦りを覚えたのではないのでしょうか。しかも、すぐそばに、蒙古高原を彷彿とさせる浅間の高地が見えるんです。私が思うに高麗郷はきわめて早い時期にいくつかに割れて、そのうちのひとつが『羊』と呼ばれる、遊牧を得意としたリーダーのもと、自立的に牧畜を始めたのではないのでしょうか。水を得た魚のように草原で馬を飼い始めた高句麗人たちの精悍な横顔が目には浮かびます。群馬という地名もおそらくはそこから来ているのでしようし、時代がくだって源氏や平家が東国の馬賊として台頭してくる素地を築いたのも、おそらくはかれら高句麗のおかげだと思えてなりません。騎馬民族は蒙古高原から西へ拡がっていつてギリシアを拠点とするヘレニズム文明を圧迫していったとするのが普通感覚ですが、こんな極東のいなかにもまた、小さなひな形におさまる形で、騎馬文明は根づいているのだと思います」。——はあ…。なんかすごいです。最後に詩がついてますね。

羊よ

田に苗を植えるがごとくに

おまえをこの野に放とう

火の山のふもと 田畑でんはたなき野に

高麗こまのかみの

猛る馬の背でみた夢に

思いは馳せゆくだろう

火の山のふもと 軽石うかぶ野に

利根・浅間なる名をこそ

遺して狩人は北に去った

羊よ この野に殖えよ 地に充ちよ

だがいつか羊よ

夢の馬はおまえをふり落とすか

それでも 行く末をのぞみて 気高く飢えよ



### 第三場 黒い照明

春夏

ねえ、あのオヤジ、さつきからこっち見てない？ 見てるってば、ほら。なんか怖いんですけど。…え、ちよつと、よしなよ、見るだけじゃん。朝からそんな攻撃的にならないの。あーあ、遠いよねー東京、2時間近いもんねー。毎日々々、何やってんだろうねうちら。本読めとかいうじゃん。ないわ、ないない、酔うもん。てきめん酔うもん。ていうか立って本なんか読めないよー、落ちつかないじゃん、混んでるし。え、なに、それ。『ゾロアスタ一の神秘思想』？ 久美。あやしい。あんたあやしい。いいから電車の中を出さなくていいから。えー、なに怒ってるの？ え？ いやー試験勉強とは違うでしょそれは。いやあたしは試験勉強も電車じゃできないけど。だーからー、見かけで判断しないの。弱っちいの、うちは。ねずみの心臓。…でき、それ、どんな本？ いや、いいから出さなくて！ 話してくれればいいからね？ なんだ、まだ読んでないの。そっか。

いやー、興味はあるよ。ていうかさ、思いだした。うちもちよつと今それ、関係ありそうなの。こないだアラル海のこと話したじゃん？ ロシアかどっかにあんの。干上がっちゃってさ、もう涸れてなくなりそうなんだってー。塩分も海以上になっちゃってもうだれも漁なんかしてないって。あと乾いた塩が町に吹きこんできて、癌とか気管支炎とかすごいって。こないださー、先生が今の地図と昔の地図、並べて見せてくれたんだよ。まっじやばいわ。笑うわっていうか笑えないわ。お猪口と大皿くらい違んだよ？ これ、住めるわけないわ、無理無理。でさ、やっぱさ、なんとか元に戻さうっていう人がいるわけよ、奇特な人が。はじめはさー、涸れた原因は「農業用水の汲みすぎ」って思ったんだよ。でもよく調べたらー、ほんとは、もう一本川つくっちゃって、そっちへぜんぶ引きこんじゃうから湖には届かないんだっていうのね。つか、バツカじゃないの？ それじゃダメなん、うちだって分かるって。いや、でさ、元に戻すってどういうことかっていうと、驚いたんだけど、川を元どおりにつなぎ直して水が来るようにするんだと思うじゃん？ 違うんだわ。海の中に防波堤で囲んだ人工的なプールみたいなつくって、そこで「小アラル海」てのを再生しようっていうことなんだって。もう工事は始まってると。なんだそれ！ でしょ？ なんだそれだよー。

いやー、よく分かんないけど、いろんな意味で間違ってるわそれ。んなのつくって、そのそばで暮らしたいと思わないもん。だいたい漁師の人たちはもう撤退して、いないわけじゃん？ 誰がその湖、使うのかなあ。でっも…仕方ないのかなあ、寂れても町はあることはあるんだし、飲料水の確保とか、最低限やらなきやならないこと、あるもんねー。でも、やっぱそれは「再生」ではないわ。違うよねえ？ 再生っていうのはさー、もつとなんつーか、木とかも生えてて、水鳥とかもいて、小舟で小ブナとかすくってきておかずに

したりとか——いや小ブナがいるかどうかはしらないけど——ね、そういうことが再生じゃん。したらね、どうやらね、いるみたいなんだわ。え？ だから、そういう再生をやるうって人が。うち、アニキが京都で似たようなことやっててさ、うん、こっちが真似したみたいな感じ。そっちになんかアラ海に詳しい人いない？ て訊いたんさ。したら紹介してくれてー。なんか妙に親切に資料とか送ってくれてさー。読んだらさー、イスラムの人たちって、すごい人助けするんだよねー。タリバンとかハマスとかも、ふだんは村で子どもに給食つくったりお医者さんみたいに医療やったり、そういうんだっつーじゃん。そこのアラル海でもね、イスラムの人のそういう動きがあるっていうんさー。んでスーフィーとかジャフリーヤとかごちゃごちゃ出てきて資料読んでも見事になっつひとつ分かんないんだけど、でもゾロアスターって名前も、あったあった、確かにあった。——え？ ゾロアスターはイスラムじゃない？ そうなの？ うっそー。いや、でも書いてあったって。ほんとだつて。いや、だつて、じゃ、なに教よ。仏教？ いやキレてないって別に。キ・レ・て・な・い。あ、ガンダーラとか近いし、やっぱ仏教だ！ 違う？ あっそ。

久美さー、よく自分から勉強できるよねー。うち課題になつても、自力でその本にたどりつけないもん。無理無理。なんつーの、うちの触角の守備範囲にないもん。どうやって見つけたの。：フラツと本屋で？ それかー！ 道理で見つかんないわけだー。早くいってよ。

だいたいね、うちね、近くしか見えてないんだぶん。人間関係とか大っ好きじゃん。嫌いな人なんていないし、興味ないものなんてない。食べ物ものだってナスとはんぺん以外はなんでもオツケーなんさー。それなのによ、それなのに、なんだこの閉塞感は。なんも悪いことしてないし、むしろ一生懸命だし、でも、なんか自信だけは自信もって「ない」っていえるし、もうよく分かんないよ、だめだうち。歴史は好きなんよ。でもこないだ「鳴かぬならナントカナントカほととぎす」っていうの、ぜんぶ分かんなかった。唯一、「かわりに鳴こうホトトギス」って——え、違う？ それも違う！ まじで。忘れて！ あとさ、手先は不器用なんよ。そのくせ刺繍とか好きなんよ。スナフキンとかミーとかのハンカチつくったよほら。あー…、得体がしれないわ、この人、はるかさん。

ドラえもんにさ、黒い光が出る電球って出てくるじゃん。それだわ。うちの半径1メートルくらいが、黒い明かりで照らされてるんだわ。なぜだか分からないけど、そこから踏み出して明るい世界に出ていくのが怖いんだなあ…。

うちからなにかに：なにかからまた次のなにかに：関係っていうのはどんどんつながって行って、それらをたばねる駅みたいなのひとつにうちがなってる。それが世界の掴み方だよ。自分のありかたってどうか。うちさ、どうやってその関係に踏み込んだらいいんだろ。

え？ ——え？ ——ええ？

「口説かれるのを待つ」。あ…、そうか。えーと…いや、でも、誰が口説くのこんな…え、いっぱいいる？！ え？！ 誰とか？！ ええー、いやーあの人は、違うでしょー、つか名前なんだっけ。そりゃ、たしかにさ、異常に親切で、うちの課題とか、もう、あの人いないとうまくまわらない感じではあるけど…え、それが狙い？！ 外堀埋められた？！ そつ、そうかな、うーん、そういうええ、もう逃げられない感も濃厚なようなそでないようなそなような…。

いや、待ってよ、アラル海だよ？ マイナーすぎるよ大1としては。これからその研究なんてするわけないじゃん、ただ今だけの課題だつて。そこにそんなにフォロー入れられても…え？ 関係ねえよ、いつも圧倒的にフォローする？！ いや、まじで？！ ていうか久美、知らないのになんでそんなに断言するんさー。え、真実だから？！ いや待ってよ。なんでうち、こんなにボケ担当なの。待って待って待って。まるであたし本当に…。いや、ん、何でもない。動揺してドキドキしただけ。何でもないつてば！

## 第四場 塩の音楽

日向子

やー、もうさー、いいよ、民族学級は。いつてことは分かるんだけどさー。こないだ文化祭の衣装着てみたんだけど、恥ずかしいや、なに代表して着ろつてのかさー。え？ 似合うよ、たぶん。踊らないよー恥ずかしい。琴ぐらい弾くみたい。でもチョゴリなら朝高ちよんこうの制服の方がよっぽど可愛いや。プリーツが細かくて、ぐーっと胸まで絞ってて。制服って無理にも着るからサマになるんだよねー。うちとかハンパだよー、自由とかなんとかいって。

まーいや。いや、いけない。民族学級だね、本名でいろつていうんだ。ヒナコは日向の子どもつて書くのね。それ、あっち読みだとイルカンジャ。

イー・イルカンジャ。それがさ、せんせいに言わせると「本名」だったんだよ。えーと：どう考えても本名じゃないよ。そうあってほしい名前でしょ。本名じゃないよ。分かるけど、本名は木下日向子だよ。イルカンジャってアルカイダの仲間かつつの。

チャンゴ・カヤグムもいいよ？ そりゃいいよ、楽しいよ。でもさー、ブラバンの方がいいなー。前にさー、たまたまみんな帰っちゃって、部室でひとりだったのー。部の楽譜もさー、そんなに面白くなくて、だって応援ばっかなんだもん。普段はスーザばっかでしょ、ほかもなんか勇ましいのばっかです、あのー、ダラダラしたやつがないの。ジャズの曲とか聴いてると、ペツトなんてむちやくちやてきとうじゃん。ああいうのいいなあ。ただ、てきとうに吹いてたいって気がすんの。でね、ひとりで居残ってたら、カセットが一枚、ふつるーいのが落ちてて、机に。なんの気なくラジカセで鳴らしてみたらさあ、おっどろいた。サックスなんだけど、風の音が入ってるの。外で吹いてるみたいなんだよね。なんかクラシック。むっちゃかっこいいんだよねー。むっちゃかっこいいの。むっちゃかっこいいんだ。

それ、もう一年も前の話。そのカセットの持ち主、探してさ。だいぶ前に卒業しちゃった先輩だったんだけど、追っかけて追っかけて、やっと演奏してる人、突きとめた。したら、民族いっしょでさー！ 目、クルクルしたよー。どっか外国に住んでるっていうんで、手紙書いた。なけなしのハングル。そんときばっかは民族学級のせんせいに全面的にたよったよ。そしたら、返事来たのー！

ハングルと日本語とロシアの字、まぜこぜの変な手紙。そんとき、なんかすごい、世界とつながった感じがした。その人なんで外国にいるのかわからない。でもあたしだってなんでここにいいのか、なんでなんだろうね。よくいえないけど、その人のサックス、たったひとり景色の中に立って、たったひとりで頑張ってる感じ：？ それがよかったんだって、いまなら思うや。

あたしさ、どうしても「その音」を出したかったのよ。ペットでいいから。部室で吹いてもさー、なんかチンケで。そのことも手紙に書いたのね。返事が遠くてさー、なかなか帰ってこないんだよね。でもさー、私にはあなたのように吹けません、あなたが私のように吹きたいなら、やはりこの景色を見なくては、て返事が来た。それで両親口説いてさ、いろいろ大変だったんだけど、とうとう行ってきたの、その人のところへ！

え？ 遠かったよ！ 飛行機なのに、結局四日もかかって着いた。タシケントまで迎えに来てくれてね。口ひげボウボウでパナマとかかぶって、ちよつとダンディに決めたおじさん。目がちっちゃくて、いつもなんか笑ってるよ

うな目なのね。ひと晩バス乗って。

その人の町まで行って一泊して、次の日に、ジープみたいなのでいよいよ沙漠に乗りこむのね。そこはむかし海で、涸れちゃっていまは塩が噴きだして、ヨモギやイラクサしか生えてないところ。漁船が座礁して真っ赤に錆びてたり。ランクルでがんがん走るとね、半日してから、やっと白い砂の向こうに、水が見えてきた。だだっぴろい湖だよ。ていうか海だよ。潮の香りもするしね。水平線？ そう。向こうなんか見えないよ。干上がってるんだけどさ、それでも、まだすっごい広いんだよねー。

おじさんね、持ってきたウオトカを、棧橋のところにあった小屋に持って行ってね、なんか外人みたいな真っ黒な人と交渉して、魚の料理、作ってもらって。食べた食べた。酸っぱい黒パンと、アサリの塩漬けど、あれスズキかな、ただのフライとね。塩は手製でね。美味しかったかっていうと、美味しかった！ 外だしねー。量は少なかったけど、パンがそれしかなかったのね。

漁師の人が、なんかいうの。ペットじゃないんだけど、なんかバルブのないランプ出してきて、吹いてくれた。ドミノだけなのに、哀愁があって、すごかった。おじさんもサックス出してきて、吹いた。沙漠と湖面とね、なんかただそれだけのために、吹いた。あたしに聴かせてるんだよ？ 漁師さんにも聞かせてる。それでも、やっぱ砂と水に聴かせてるんだなあって。

夕暮れてきてさー。音は、どこまで流れていくんだろうって思った。やがてしずかに已むのね。シーンとした平原に、どこか遠くでどうどうと風が鳴ってる。ねえセルゲイおじさん、あたしもあんな風に吹きたいです！ おじさんね、ろくにことば通じないんだけど、ここでは、塩を吹くんだけ。風を吹くんじゃない、塩を吹くんだけ。それは君にはできないだろうって。帰って、自分の町で、自分にできることを精一杯やったらいいのさ。笑ったような目で、そう言った。俺はこの地で死んでいくよ。そうも言った。どうして笑ってられるんだろう、どうして演奏なんかできるんだろう、セルゲイおじさん、おじさんは、何をしてる人なの？

縁があつたらまた会おう。そう言ったんだ。あたし、こうしてまだペット吹いている。またいつか、会えるのかなあ…？

## 第五場 水門テロ

洗

寝んなや。なあおま、頼むでほんま。プレゼン明日やん。な？ キミの後学のためにわざわざこの夜中にひとり芝居やってんねやんか。キミには感謝の

気持ちゆうもんが：うそうそ、ボクの勝手な都合です。ごめんなさいつきあ  
つてください。なに、眠い？ そんな眠いか。じぶん俺の話がそんな眠いか。  
分かった、起こしたる。なあ、寝顔かわいいなあ。：起きたな。よしや、続  
けんで。せや、関係あれへんけど妹さん元気？ 寝顔かわいいなあ。：完全  
に起きたな。やんで。なんやねん怒って、冗談やって。

まーやんで。なにしろな、そもそも無理やっちゅうねん。レポできるような  
旅ちやうねんで。おま、そもそも予算取つたらな、計画通りに使わなあかん  
ことは子どもでも分かるやろ。そこからしてむっちゃ適当や。教授もな、ま  
ー普通ちやうとは思ってんけど、あのおっさん大概やで。又クスいうたらお  
ま、カラクルパクスカヤいうて、ウズベクの西の外れや。そつから湖岸まで  
また長いことバス乗んねんけど、首都でもらつた紹介状な、教授、なんでか  
俺に渡すねや。ちよ、これ持つとき、はぐれたとき役に立ついうてな。はぐ  
れさず気かつ。そこでな、たまらんでゆうてカンが働かなかつたのが俺の運  
の尽きや。バス、何でか夜中に走つとんねん、仮眠しながら乗ってんけど、  
着いたら、教授がおれへんやん。あやあ便所休憩で取り残されたんちやう思  
てんけど、よう見たら荷物ごとないねん。や、パニックやで、これは。だい  
たいこどこや。町の名前もよう知らんのに。アラビア文字みたいなもの、  
あんなん読めんわ。どうせえちゅうねん。乗客の身ぶり手ぶりやな、なんや  
連れのおっさん、途中で降りたいのは分かった。いや分かるか、分かれへ  
んて、なんで降りんのや。ワナか。ワナやな。かわいい教え子にこれ旅させ  
ろゆう親ごころや。なるほど。いらんわ！ 途方に暮れるとはこのことやで。  
腹くくってメシでも食うしかあれへんやん。しゃあないからケバブ屋のテラ  
スでトマト煮たの、たのんで食いながらな。紹介状：。せや、藁にもすが  
るで。紹介状見たらな、なんや名前がイスラムちやうねん。よう読まんけど、  
パク：せ：ギエ：？ 朴世軌パク・セギエ：これ、韓国系ちやう。ああ、朝鮮語ならいけ  
んで、ウズベキスタン語よりはな。一縷の希望が見えてきたと思てん。けど  
な、行き先が書いてへん。力抜けたわ。紹介状やん、相手に渡すもんやさか  
い、ボクに親切には書いてへんねん。どこへ行けつちゅうねん！ ええわも  
う。

ふててな、トマト煮食うたよ。この際やから、むっちゃのんびり食つたつた  
わ。落ちついて見るとなあ、さっぴれた町やで。ソ連時代の革命モニュメン  
トみたいなもんがな、ほこりにまみれてどどーんと残ってんねん。栄枯盛衰。  
衰でもええけど、この場合、悪いのはぜんぶ中央やる？ 住民の罪？ ん  
な酷なこといいなや。移民やで。来なくてもよかつた連中やんか。エストニ  
ア人、グルジア人、朝鮮人。ウズベクには朝鮮人は百万以上おんねんで。も  
ともと根のないところやな、漁師だの百姓だの、ようできると思うか？ こ  
れが社会主義のごつつまちごうたところや。人は、百姓や漁師をやめること

はできる、でもそれになることはでけんねや。体がそういう風になってへんねや。なあ。町の真ん中に、なんや断層みたいな垂直の、人工の崖があつてん。高さそうやな、10メートル以上はあつたよ。気がついてんけどな、それ、もとの港湾の跡やった。なあ。地平線まで水なんてひとつかけらもないんやで？ でもひと世代前まで、この水揚げいうたら、スズキ、ナマズ、それにチョウザメ、ここはなあ、まさに中央アジアのオアシスやつてん。

ほんなこと考えてたら、誰かが僕の前に立つんや。彫りの深い：まあ美青年やな。サラームゆうて握手したらな、メシをおごらせてくれいうねや。いま食うたところやさけ辞退してんけど、ゆうか近づいてくるやつゆうたら普通悪者やん、用心してんけどそいつがな、どうやらボクを何かの記者だと思つてん。記事書いてくれいうやんか。なんの？ そりやおまもろん、アラル海の記事や。俺もまーこのまま迷子になつただけのゼミ旅行やつたらおさまりひん、ええよ、ワリカンでええからなんか食おうで、ばつちり話してや、ゼミのレポでばつちり話したるからな、ゆう気になつてな。兄ちゃんな、シヤシリークいう羊のあばらの丸ごと一本、ごっつい焙り肉、注文したもんや！ ほんでな、

「一本の足をふたりで食うんだ、俺たちはもう兄弟だぜ。お前に危険があつたら、俺は全力で守つてやる。さあ、握手だ。なあ、羊は旨いか？ 俺たちはな、ずっとこの草原で生きてきた。お前には沙漠に見えるかも知れないが、このトゲだらけの灌木を食つて、羊は生きのびられるんだ。沙漠の生き物はしぶといよ。あすこの草むらを見るよ。海は涸れて遠浅は地平線の向こうになつちまつたが、なんでああ繁つてられるんだ。なあ、あいつらの根は真下に向かつて20メートル以上ある。井戸より深くから、わずかな水を吸いあげるんだ。ここキジルクム沙漠には非常識な生き物がいくらでもいるぜ。そら、目の前の、藁くずのかたまりみたいなのあるだろ。あいつはあれでいつこの草さ。風が吹けば転がついていつて、風の止んだところですぐに根を張るんだ。そう、まるで俺だ。」

どだいな、こんな沙漠に運河をひいて大農園をやるうなんて、無理だつたんだよ。どれだけの水を供給しなきゃならないか、流れの途中でも水は沁みちまうしさ、海の水位が変われば塩分も変わるのに、なにしろ昔はホルホーズ一本槍で政策は進んだからな。今年で運河ができて50年だよ。その間、アラル海の面積はじつに十分の一になった。そんな代償を払って誰が十倍豊かになつたつていうんだ。遊牧者である俺たちは言わずもがな、肝心の移住者たちにしてからがかつかつの生活から抜けだせぬに。砂は農地を呑もうとするだろう？ 人間はどこまであらがい続けられるかね。イシャーンがいつてたが、本気で綿花のプランテーションでやつていけるなんて、今じゃ政府だつて思つてはいない。ただ今をやり過ぎしているだけさ。そもそも国家

ということ自体に無理があるんだよ、沙漠だからなここは。

え、遊牧をしてるのかつて？ 俺が？ いやなこと訊くなあ。——その通り、爺さんの時代に放棄したよ。ソヴィエト時代っていうのは職業を選べるような状況じゃなかったんだ。今は、大宇デューのラインに詰めてる。お前の国の自動車工場さ。知らない？ 知らないことがあるもんか、でかい会社だよ。気がついたろうが、ウズベクのトラックは国産なんだぜ。生き残っていくためには何よりも流通、と政府は思ってるんだろうな、道と車にはじつによく金をかけるよ。けどな、働きながらも思うんだけど、こんなに増産してどうするのかねえ。これだけのトラックで運ぶほどの物流がこの土地にあるんだろうか。イシャーンがいったが、おそらくは中央アジア横断ハイウェイみたいな構想があるだろう。でもそれにしてもさ、何を運ぶっていうんだい？ なんていうかさ、物事には妥当な程度つてもんがあるだろう。生きるための「程度」っていうのは、ようするにどれだけ草が生えてるかかってことでしか量れないものはずだ。1年歩いて50頭の羊が餓えない程度。たとえばその程度にしか、この土地では人は生きてはいけねはずなんだ。よく勘違いされてるようだけど、問題の根本は移民とか、無理無体なコルホーズ推進とか、そういうことじゃないんだと思うんだ。流路を変えて農園をつくったって構やしないさ。問題はそれが極端だ、っていうことだろう？ こんなに大勢を食わせることはできないんだよ沙漠ってやつには。

イシャーンが、今日もいったよ。人が減らなければ幸いはない。分をわきまえる者だけが生き残るってな。俺たち遊牧者は我慢に我慢を重ねてきたぜ。これ以上堪えても、もうただ滅びるだけさ。漁民は、どうしても残りたい者だけが残った。キャビアが獲れなくなったために漁業計画は完全に頓挫したんだけど、スズキは塩湖でも生きられるからな、全員が立ち去らなきゃならないわけでもない。どうにか農園の方もこの伝で、1割くらいに生産を抑えてくれないもんだろうか。イシャーン？ ああ、まあ「長老」みたいな意味だよ。本名は知らない、地下組織だからな。ウズベクとかタジクの遊牧者復興運動は、現地の俺たちみたいな若いもんと、いろんな方法で密入国してきた年長の指導者たちで構成されてる。シ어도いるぜ、スーフイーもザラトウシュトラも混在だ。原理主義じゃないんだよ。むしろスキタイの昔を思える的な精神論を普及させるために動いてる。イシャーンがいったけど、俺たちのバックにはやっぱり武力をもった集団がいることはいららしい。でもそれくらいは仕方ないさ、工場細胞ならまだしも、郡部で困窮者の支援をするような場合にはどうしても武器は必要だからな。

な、兄弟。ちよっと耳を貸せよ。じつはな、爆破の計画があるんだよ。このカラカルパクの隣にはコラズムのプランテーションがある。アムダリヤから



引いてる運河のいちばん大きな分岐のひとつなんだが、ここの水門を爆破して、水をアムダリヤ本流に戻そうっていうんだ。なあに、綿花に水が行かなくなるわけじゃない、少ない水を分けあおうってだけの話さ。そりゃ移民たちにしてみりゃ災難だよ、それは分かっているが、彼らだけを優遇した結果、土地全体が滅びかねないことになってるんだ、少しは割り食ってもらわないとな。もちろん、爆破のあとには、水門に替わる分流施設をつくる。イシャーンのイメージでは——あ、かれはパキスタン国籍で、カッチ湿原の灌漑に長くたずさわってきてるんだ——かれによれば、可動式の水門はどうしても権力の恣意が働きやすいから、原始的な土堤を積むのがよかろうっていうんだ。バンクさ。そうして水争いが起きたら、双方が具体的な交渉力と労力を費やして、土堤を工事して解決する。俺たち遊牧者も、農業移民も、コラズムの原住者も、それならなんとか折り合いをつけていけるだろうって思うんだ。爆破自体は犯罪さ、それは分かっている。でも実行犯はすぐトルクメンに逃れさせる手筈はできてる。いちおう国際組織だから俺たちは。まあ見てくれよ、半年もしたらお前のところの新聞にも載るから。——」

こないやで。あのな、仮にも国から予算もろうて出かけてな、こない反政府的なもんようレポートせんわ。なに、フカシ？ フカシかな。フカシやったらなおさら書けんて。まあええわ、今ゆうたことは、じぶんの妹のためにとつといたる。なんて？ いやそもそもはわしら、その繋がりやんか。はるちやんが調べものするいうてはるばるうちとこのインチキ教授に電話してきた、たまたま俺がいて電話に出た。きっかけはそうや？ おま、いつもまるで俺が口説いたかのようにいうけどな、事実は逆やで、はるちゃんの方が俺を当てにしてつきおうてくれいうたんや。ほんとやって。何？ いつ寝顔見た？ もうええがな、冗談や冗談。冗談やいうてるやん、ほんま関東の人間しやれ効かんなあ。まあええで、したらまた続き、始めんで。だから寝んないうてんねん！ 頼むでほんま……

## 第六場

### 谷間の死

愛

ロシアのアニメーションってすごいんです。日本のみたいにコマ飛びしないで秒間24コマのフルアニメ、しかも原画が水彩画だったりして、もう何ていうか、それで食べていけるわけじゃないじゃない！という、ほんとうのマニアの世界。で、監督でロシア系のセルゲイ・パクっていう人がいるんですが、これが不思議なんですよ。アニメなのに、ドキュメンタリー。なんでかって？取材された出演者が本当のことをしゃべってもいいのかどうか、判断できないくらい危ない作品だっていうことです。声はたぶんモザイクではなくて、他人の吹き替えなんだと思います。そして顔を隠したらただのニュース番組扱いじゃないですか、あくまでも美しいもの、社会的な問題を扱いながらも、

きっちり美学を持ちつづけているスタイル、そういうことを追求するために、たどりついた方法だと思っただけです。3年にいっぺんくらいしか作品を出してこなくて、それはそうですね、1時間のものを作るとして24コマの3600倍でしょ。その分量を、ほんらい速報でなきゃならないニュースのために費やすっていうことは異常としかいいようがないんですけど、それによつて見えてきたこともありすよ。日々の出来事に惑わされずに、ニュースは長い目で見ることに。長い目で見ると、ひとは次第に、土地のことを考えるようになります。かれセルゲイ・パクは、土地のことを見つめていようとした監督なんだと思います。ペン画デッサンに水彩淡彩という穏やかなマテリアルもね、たぶんかれの故郷のウズベキスタン、アムダリア川デルタの田園からの発想だという気がします。

私は絵に挫折したことがあるんですね。美術部だったのはたまたまで…え？：たまたまですよ、子どもってなんか勢いでクラブに入っちゃうことってあるじゃないですか。小学校では虐められてたから、中学でまで友達関係でしくじりたくない：仲間が欲しかっただけなのかも知れません。でも、やつてみると絵って、すごく「素振り」なんですよ。とにかくもう、やたらアポロンの石膏像をデッサンし続けなきゃならない。来る日も来る日も。私って体力あったから、炭は燃すもの、パンは食べるもの、アポロンの堅琴は聴いてもいいけど顔をコピーしてもなあって、つまり絵ってものがぜんぜん分かってない美術部員でした。美術部ってよく、実質は漫研だったりするんですよ？　うちはたまたまそういう部じゃなくて、お堅い感じ、顧問がほんとに絵描きで白髪まじりの髭ボウボウにしたいかにも不良絵描き！てひとで、なんかほんとに絵が好きなきな子が集まるところだった。その先生がある時、おまえさ、そんなに苛々描いてるんだったら、これ見てこいよって、くれたチケツトがセルゲイ・パクだったんです。ロシアの方の涸れかけた湖のほとりの沙漠で羊を飼ってる人たちと、新しくできた鉾山に出稼ぎで来てる外国人——っていうか国内の異民族なのかな——とにかくイスラムの昔ながらの静かな生活にいきなり都会のやかましい文明が入ってくる、酒場も入ってくる、そういうったときに両者がどう喧嘩してどう折り合っていくのかっていうようなテーマの、そのくせアニメなんです。衝撃だった…。なんだろう。それが実写でなく「絵」であることに、なんかすごい切なさを感じたんですよ…。

うまくいえなくて、翌日学校でそのことをいうと、高良<sup>たから</sup>、おまえ、美術がしたいのか？て訊くんです。私、何がしたいのかまだよく分かってなかったから、そのままそう答えたら、コーヒー淹れてくれて。部屋はサロンみたいなもんでしたからね。で、やがて、変なこといいます。一人形劇ってあるだろ。あれはアジアではけっこう古くて、文楽とか浄瑠璃とか、近所の外国だとベトナムの水中人形劇とか、韓国の足のお面はめて逆立ちしてやるのとか、変なのがいっぱいあるんだ。なんでだと思っ？——キョトンとし

てると、「影絵つてのもあるよな。ジャワのが有名で、これは2時間ものの演目が300以上あって物語は全部入り組みながらつながってる。ホメロスやプールの10倍じゃ利かない分量で、2番手に圧倒的な差をつけて堂々世界第1位の巨大絵巻なんだ。それとな、歌舞伎のクマドリってあるだろ、あれ、なんで顔にペイントするんだと思う？ 必要あるのかな。——なんのことですか、先生。「あとは落語だな。昔は浪花節とかもあつただけどぐに落語だな。あれ、なんで、ひとりで座りつきりで何役もやるんだろうな。ひとの生身がなくて、声だけがあるみたいじゃないか。——知らないですよ。なにいつてるんだか分かりません。「高良よ。アジアの芝居には、人間が出てこないんだ」。

——ゾクツとしました。：え？ なんていいました？「演劇には機能、つてもんがあるんだよ。生きた人間同士の関係のもつれとか、神々との契約とか、あるいは冒険とか、労働争議とか、演劇には主題つてもものがある。アジアの演劇のテーマはその意味でいうと、それらのどれでもない。なんだと思う？」——分かりません。いや、分かったのかも知れない。ぼんやりとは分かってた。でも言葉にならなかつたの。分かりません。「——つまり、『鎮魂』だよ。——ああ…。そうか。ほろびた人々の「思い」を画面に乗せてたのか、あの映画は…。絵だつてそうだ、少なくともセルゲイ・パクはそういう作品を見せてくれた。生身の人間は映画に出ない、なぜなら、もういないからだ。私の絵に足りないのはそれだ。デッサンそのものができないんじゃないから、動機がないからデッサンができないんだ。先生、私、描きたいものが**なんだか分からない！** 先生は安コーヒーを飲み干して立ちあがりながら、「もつと体、動かしたらどうだ？ なにも絵だけが人生じゃないぞ」と大あくびして、しょんべんしてくる、て出ていきました。

役者かあ。役者ね。人間をやらなくて…。なによそれ…。

セルゲイ・パクのほかの映画もいくつか見ました。「顔と名前」という短篇、これは、たとえば金なんとかつていう純血のコリアンが孫の世代のピョートル・イワーノヴィッチ・キムとかになるまでにどのくらい顔や表情が変わるのかつていう、顔ばかりを映したアニメならではの作品。また「羊」というファンタジーではコーカサスの冬山で迷子になったカレイツの子がいて、凍えそうになるんだけど実はその山全体が大きな羊で、かれは凍死せずに帰ってこられました、という話。そして「水南邑1937」。国境を越えてロシア側に住んでいた朝鮮人たちが、どうやって連れ去られ、遠く遠く中央アジアの農園や炭坑に送りこまれたか、どうやって白菜もない土地で生きのびているのか、そういうことを実に200人以上の聞き書きと2時間を超える長

さで描いた、文句なしの代表作です。どれを見ても、愛があるんです。いちばん下のひとびとと一緒に目を持つてる。私は虐められてたから…いつもなんとなく体裁を繕うために「演じる」ことばかり考えてて、だから、やりたくもない絵なんかも描く羽目になってたんです。かれのことをもっと知りた。調べてみると、でも最初に見た「アラル海」という映画を最後に作品は撮っていないんですね。いえ、ちゃんといいます。これからが大事なんです。かれは死にました。

北オセチアという小さな国があります。カフカス山脈の北側の谷にあるミニ国家で、ロシア連邦の一部になってます。氷河がえぐったU字谷の奥まで分けるように細々と人が棲んでいます。セルゲイは、たまたまその村へ取材に入っていました。そして氷河の崩落事故に遭ったんです。不運としかいいようがありません、何百年かに一度の崩落に、よりによって出くわすなんて。古来より棲みついたオセット人の山村に、極東の朝鮮系がなんの用事があるっていうのか。強制連行がどんなに苛烈だったといたって、炭坑もないこんな山奥にまで同族が住まっていたというわけでもないでしょう。おそらく、そこに住むこと以外の生き方はない、という人たちを見たかったんだろう、そんな風に思っていました。風向きが変わってきたのは、意外にも映画「アラル海」が少し話題になったことよってでした。ロシアの人工衛星はひじょうに高性能かつ比較的情報がオープンになっていて、アラル海が小さくなっていることも主に衛星写真によって逐時的に世界に発信されてるわけですが、ある時ね、そのカルマドン峡谷という北オセチアの谷で「どうやら氷河の流れが少し速くなっている、ちかぢか崩落するらしい」ことまでが画像からの熱分析や地勢変化から予期されていたのだ、ということを地元紙がすっぱ抜いたんです。氷河の下に住んでる同じ谷の人たちが、崩落があればどういうことになるか——誰にだって分かる。それなのにロシア政府は危険を村に伝えなかったんです。そのことも世間では問題になったんですが、それより私が気づいたのは、それをすっぱ抜いた地元紙ってというのが、アラル海絡みの記事として追跡取材をしていた地元ウズベクのタシケントで出ているハングル文字のレーニン・キチという新聞で、主筆みずからこの記事を書いているんですが、かれの、いえ、彼女の名をシューラ・ヒョントーヴァ・パグアといまして、セルゲイの実の妹なんです。レーニン・キチが政府の隠蔽疑惑を書きたてたのは崩落事故のわずか2日後。半国営のメディアとしてはさすがに事前に発表するところまではできなかったのでしょうけれど、事実を知ってはいたと考えるのが自然でしょう。では、なぜシューラは兄にその事を報告、引き止めなかったのか、どうして見殺しにしなきゃならなかったのか。このことが謎で、ずいぶん考えました。かれら兄妹の仕事や性格に思いをめぐらすうち、ある時、ふと思っただんです。——知らせたのではないかと。ね、彼女は兄に知らせたんです、だって…。スターリンの民族シャツフル政策がカレイツをはじめ何十という民族の文化を徹底的に破壊したこと

は、かれらの骨肉に浸みとおった記憶・感覚だったはず。そしてソ連のなくなった今でもなお、かつての過ちに対して政府が真摯に謝罪し対応するなんていうことはありえません。たとい故郷に帰そうっていったってかれらはもう帰る故郷がどこなのかさえ分からないんですから。ならば、せめて、同じことをくり返させてはならない。かつかつに懸命に生きている民族がみすみ滅んでいくことにはもう堪えがたい。なのに、いまやテクノロジーの目の前でひとつの部族が氷河に吞まれて消えようとしている。無名の山村が滅びたところで世界にそのニュースは届くまい。ならば……！ということだ。たのではないでしょうか。魂を鎮めるために作ってきた、映画。さすがますよ、取り組み方が。だって——去りゆく魂だけが誰かの心に届くなんてことがはたして、あるのだろうか。——あるんです。あるんです。現にここで、私が受けとめている……。鎮魂、か……。

## 第七場 兎の背中

友香

こないだロシアに行ってきたんですが。え？ いや、ただの旅行で。最近北京から汽車で行けるんですよ。品川から大垣夜行「ムーンナイトながら」で大阪まで行って、燕京っていう客船で天津まで行って、あとは一本。SLで四日かかりますけどね。むこうではロシアの通貨もロシア文字も使うけれども、人はむっちゃふつうのイスラムの人で、遊牧民、て感じですよ。キルギスのビシケクからバスに乗るはずだったんだけど、なんの都合かバスが来ないのね。で、招待所っていうバス停の建物で半日待ってたら、なんか不格好な豚バナのトラックが停まるんです。それで「乗っていかないか」って。それが「その男ゾルバ」みたいな腕っぷしこんな丸太ん棒の目の青い金髪の運ちゃん、運ちゃんってやっぱ世界的に屈強な感じなんだあって思った。国境越えてからは道は意外とよかったですよ。トラックはカミナリみたいな音たてたり、発進するたびにノッキングして最悪だったけど。空が広いんですよ。乾いてて標高高いからか、日本みたいなくすんだ青じやない。原色です。

キルギスの運ちゃんなんてロシア語話せるのかなあって思ったら、なんと北京官話ですよ、金髪碧眼のあんちゃんが。それでね、密輸だっていうんです。即座に私「お酒？」て訊いたら、さすがにお酒は重罪なんで専門の業者がセブンアップの壇に詰めて運んでるんだって。かれは家電品とか雑貨とか、中国産品なんでもの人でした。捕まらないの？て訊いたら「全員密輸だよ。国の貿易なんてないよ」だって。ふた晩そのアリーってあんちゃんと泊まって、ウズベクに入った。首都からこんだちゃんとしたハイウェイバスで一路、西へ。マイカーなんて走ってない、トラックばかりのハイウェイでした。蜃気楼見ましたよ。ほんとに湖とか宮殿とか見えるのね。こんな沙漠に王国が

あつたこともあるのかつて、感心した。

思えばスキタイの土地ですからねえ。三千年の歴史をこの沙漠は抱えてるんだなあつて。今でも遊牧民はいます。カラクル・ラムつていう毛皮用の黒い子羊を飼つてる人はわりと規模が大きくて、そのほかにも昔ながらのヤギを追つてるのもいる。カラクルつてトルコ語で「黒い海」つていう意味で、どうもアラル海のこらしいですね。スキタイが勢力を大きくできたのはアラル海つていうオアシスがあつたからで、これはいいネーミングだと思います。

遊牧つて、農業よりもずっと古いらしいんですけど、よく思いつきましたよねえ。狩猟の非効率ではただ暮らすのが精一杯だったでしょ。食べものを生きたまま連れ歩くことで餓える心配はないし、交易もできる。そうやって大きくなった。遺跡からは弓矢も出てきますけど、ヘロドトスの記述になるともうスキタイは槍ばかりで、ちつとも矢を射ないんです。紀元前8世紀とかいうものすごい昔にすでに、狩猟をやめてるから矢がないんですよ。

私、いぜんアーチェリーやつてたんです。けっこういい線いつてたと自分でも思うんですが、ある時ね、ウサギになった夢を見たの。

その駆け去つた背中をみたか

逃げるためだけのばねの脚あとを

刈られた葦はら ざざざと鳴る鳴る

雲はひとすじすばりと切る切る秋空を

鷹や野犬のほろんだあとも

みじかい耳を澄ませる兎

とっぷりと洪水が葦はらを覆つたあの日

かれはどこまで逃げたのだろう

耳もあと足もいつまでもいつまでも残つて、齧<sup>ず</sup>歯<sup>し</sup>目でしぶとく増えつづけるだろうから、たぶん哺乳類はけつきよく、じぶんらの始祖とだいたい同じ姿で最後のかたちを迎えるんだと思います。三疊紀のトガリネスミとほぼ同じに、ただ、逃げるためにあと足と耳だけがすこし発達した形態でね。十萬年後、誰もいなくなつた河原で、ただ兎だけが逃げている……。これは、怖いわ。賽の河原だわ。アーチェリーの私の矢はべつだん兎を狙いはしなかった。いえ決して狙いはししないで。それでもね、なんかふと「もう矢を射ることはできない」つて思った。なんでかなあ。なんでかは分からないけど。

弓と矢つて、もしかして起源、別かも知れませんが。手矢とかつて明治ごろまで使つてたらしいじゃないですか。独立したもんですね。いつかずっと昔

のどこかの時代、子どもの遊びかなんかで偶然、弓と結びついたんじゃないのかな。じゃあ弓はなんだかっていうと——うーん——楽器？かもね。ブン！て鳴る瞬間が好きだったことは確かです。矢はなくとも、弓だけで何かを的に届けることはできる気がしてきました。何を届けよう。ウサギに何を届けようか。

話は変わります。私の住んでる団地、ちょっとだいたい田舎の田んぼの真ん中にあるんですけど、できてもう三〇年とか経ってて、もう子どもが少ないんですね。ところがその数少ない子どもの中にひとりとおぼいのがいて、かれ、小学生のもう三年生のころとかから公園で遊んでも「不良になりてえなあ」っていつてたの。それがね、中学生になったらもうたちまち、剃りこみリーゼント、薄茶のグラサン、ニッカポッカに女物のサンダルに、特高服に紫の刺繍してとか、いったいこの田舎にどっから持ってきたんだっていうかっこになって、でもそれがたったひとりなんですよ、仲間なんかなくて、田んぼの中の団地でただひとり、古い文化を保ってるの。まるでねぶたですよ。私ときどき眠れなくてふらっと夜中に散歩にでると、いつだってかれ、団地に一軒しかないコンビニで立ち読みで粘ってたり、店員さんと仲よくなって喋ってたり、中一でしょ、バイクどころかバイクもできないんですよ。行くところって深夜はコンビニしかないの、大平原の小さな団地だから。なんていうかね、かれ、村が減んで団地ができて、そういう社会の負のサイクルを何回もぐるーっと回ったあげくに、すごいちゃんとした子どもとしてふりだしに立って、この土地に生きてるなあって思う子なの。団地のお母さんの間でもかれ、評判いいんですよ。愛されてるんです。情に厚いしね。長いこと公園の危険はかれが仕切って、幼稚園児たちを守ってくれてたんだ。

私ね、おこがましいけど、あのうなんだっけ、トラックの雑誌：ええとデコトラの、そうだ「カミオン」っていう雑誌があるんです。恥ずかしい話だけど私、彼を見てると放つとけないっていうかドキドキしちゃって、いつかカミオン買ってかれに「キミ、長距離トラックの運転ちゃんになりなよ」っていつてあげたいんです。かれのスケールはこの団地とかからはいずれはみだしていく。そんなら、そんならね、倶利伽藍フンドシに日本海どどーんのねぶたを背負い、大型トレーラーでアジアの沙漠を駆け抜ける運転ちゃんに：かれ、ならないかなって…。

スキタイは軍事的に強かったんじゃないんです。交易に生きたから強かったんです。ならば今ならともかくもトラックですよ！そして、弥生時代の植林が関東の丘陵に雑木林として、二千年経ったいまでもしぶとく遺ってるみたいに、作りなおされたオアシスとしてアラル海がもういちどアジアの地史に顕れてくる日がきつとくる。そう思われてなりません。そこをね、一台の、海を背負ったトラックが駆けるの。彼のために一羽の歳とったカモメの歌な

りと、贈りたい気持ちで私いま、満ちあふれています――。

〔初演記録〕みやしろ演劇パーティ／二〇〇九年二月二二日～三月二九日／  
宮代町和戸公民館、団子坂 Brick-One、草加市渡辺教具製作所ミニ博物館／演  
出・高野竜／出演・冬月ちき、内山次音、酒井春夏、斉藤光向子、竹下洗、  
金城愛、加藤友香、武井りえ、志賀未奈子、関根李沙、岩崎節子、紫竹あか  
ね、DJ魚辰